

第4章 実態把握（心理アセスメント）

個別の指導計画を作成するうえで、子どもを理解するために子どもの実態を知るとはとても大切なことです。子どもに関する様々な情報を得るために、日々の行動観察は欠かせません。

しかし、行動観察のような主観的判断に加え、客観的な情報を得る上で、検査法を活用することはとても有効です。

ここでは、子どもを理解するための情報収集と分析の一つの方法としての、「発達検査」と「知能検査」について、それぞれの代表的なものを紹介します。

1 発達検査

子どもの発達の状態をみるために発達検査があります。発達検査には、保護者等が質問項目に答えていくタイプのものと、子どもに課題を与えてその反応をみるタイプとがあります。

一般的に発達検査には次のようなものがあります。

遠城寺式乳幼児分析的発達検査法
K I D S 乳幼児発達スケール
新版 K 式発達検査
津守式乳幼児精神発達診断法 等

ここでは、本市において特別な教育的ニーズのある子どもの就学前の発達検査としてよく使われている『K I D S 乳幼児発達スケール』（以下、『K I D S 』）について紹介します。

(1) K I D S の概要・特徴について

ア 概要・特徴

日本の財団法人によって1989年に開発された検査で全国38都道府県の乳幼児約6,000名によって標準化されたものです。「K I N D E R I N F A N T D E V E L O P M E N T S C A L E」の略称です。

乳幼児の自然な行動全般から発達を短時間（15分間程度）で捉えることができるものです。

適用年齢：0歳1か月～6歳11か月

対象年齢等別に4タイプの検査があります。

- ・ タイプA：0歳1か月～0歳11か月用
- ・ タイプB：1歳0か月～2歳11か月用
- ・ タイプC：3歳0か月～6歳11か月用
- ・ タイプT：0歳～6歳児（発達遅滞児向き）

「タイプT」については、知的障害が顕著な場合は中学生年齢まで対象とすることが可能とされており、本市の就学相談等においてもよく使用されています。ここでは、この「タイプT」について説明しています。

イ 検査領域と質問内容

次の9つの領域についての発達状況を調べることができます。

領域名	内 容	領域名	内 容
運動	体全体の大きな動き	対子ども社会性	友達との協調行動
操作	手指などの意図的な動き	対成人社会性	大人との関係、特に親子関係
理解言語	言葉の理解	しつけ	社会生活における基本的なルール
表出言語	話すことのできる言葉	食事	衛生感覚や食事の基本的なルール
概念	状況依存によらない言語的理解		

丸付き番号は検査番号

K I D S の領域とその内容

また、質問内容の具体例は以下のようになります。

領域名	具体的な質問内容の例	
対子ども社会性	7	× 子ども同士で追いかっこをする。 <21>
	8	× 友達の名前が言える。 <23>
	9	× 電話ごっこができる。 <24>
	10	× 友達とケンカをすると親に言いつけにくる。 <27>
	11	× ままごと遊びで何かの役を演じる。 <35>
領域名	具体的な質問内容の例	
しつけ	10	× 頭を洗っても泣かない。(シャンプーハット使用を含む) <34>
	11	× 夜のオムツがいらぬ。 <36>
	12	× 口をすすぐことができる。 <37>
	13	× 箸が使える。 <39>
	14	× 自分でパジャマが着られる。 <41>

番号は質問番号。「 × 」は回答記入欄。 < > の数字はその課題の到達する月齢の目安。

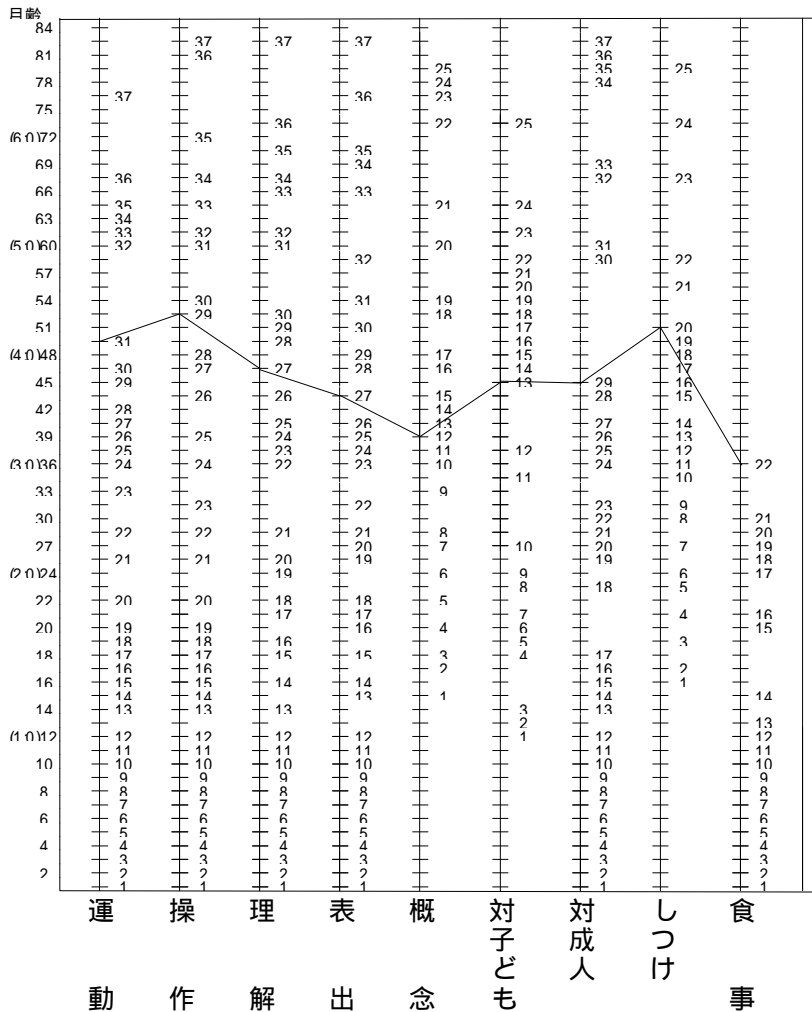
ウ 回答の記入の仕方

回答の記入は、保護者や教師のように対象児をよく観察している人が、日頃の行動等を思い出して、 印か×印のどちらかを丸で囲みます。

下のような基準で 印と×印について判断します。

印	・明らかにできるもの。 ・過去においてできたもの。 ・やったことはないが、やらせればできるもの。
×印	・明らかにできないもの。 ・できたり、できなかつたりするもの。 ・やったことがないので、分からないもの。

(2) 結果の見方の例



KIDS発達プロフィール例

この事例は、次のような子どもです。

【事例：生活年齢6歳0ヶ月】

ふだんは、人前では自信がなく、あまり話さない。プロフィールからは、「操作」は高いが、「概念」「表出言語」の落ち込みを読み取ることができる。また、「対子ども社会性」「対成人社会性」「理解言語」も低い方である。換算表による総合発達年齢は3歳9ヶ月である。総合発達指数（生活年齢÷総合発達年齢×100）は63。

「食事」については、発達年齢が3歳以上にはならない領域である。

「概念」の質問項目は、「『多い、少ない』が分かる」「『くやしさ』が分かる」といった項目のように状況によらない言語理解を測る領域です。「概念」や「言語理解」だけへの取り組みをしても向上するものではありません。「対成人社会性」が示す大人との関係性を深めることで、関係が深い大人を介した友達との関わり方等（「対子ども社会性」）を向上させたり、その過程で「言語理解」や「表出言語」を高めたりすることにつながっていくものです。各領域ごとの発達年齢や発達指数を求めることはできますが、その数字だけにこだわらず、プロフィールの全体像を把握することが、個別の指導計画を作成する際の有益な情報となり得ます。

質問に回答した結果を各領域ごとの発達年齢によって、発達プロフィールを表すグラフを作成します。左のようなグラフになります。

回答の結果から次のような情報を得ることができます。

領域ごとの得点に基づいた発達年齢や発達指数。

全領域の合計得点に基づいた総合発達年齢や総合発達指数。

グラフにした発達プロフィール全体から発達の全体像や個人内差。

2 知能検査

子どもの知的能力の水準をみるために知能検査があります。知能検査には、集団で行うタイプと一人一人個別で行うタイプがあります。

一般的に個別式の知能検査としては次のようなものがあります。

ウェクスラー式知能検査
(幼児向けの「W PPSI」、児童生徒向けの「W B C」、成人向けの「W A B」)
田中ビネー知能検査 (従来からの「1987年版」と改訂版の「V (ファイブ)」)
K - A B C 心理・教育アセスメントバッテリー
I T P A 言語学習能力診断検査
グッドイナフ人物画検査 (D A M) 等

ここでは、本市においても特別なニーズのある子どもの知能検査としてよく使われている「日本語版W B C - 知能検査法」(以下、「W B C - 」)について紹介します。

(1) W I S C - の概要・特徴について

ア 概要・特徴

アメリカのウェクスラー (Wechsler, D.) によって開発された概ね学齢期の子ども用の個別式知能検査の改訂第3版が原版で、それを1998年に日本語版にしたものです。一般的な知的能力の水準を測定することができます。

個人内差 (個人における多種の知的能力の強弱、認知特性等) をも測定することができます。

このように、個人の知能水準と認知特性の両方を把握できるという点が特徴です。

適用年齢：5歳0か月～16歳11か月。

検査に係る所要時間：約60分間。

イ 設問の構成と測定可能な能力等

13種類の課題 (以下、「下位検査」) から構成されています。このうちの10種類を基に一般的な知的能力の水準である「全検査IQ (F I Q)」を測定することができます。

13種類の下位検査は大きく2種類に分けることができます。

- ・ 言語性下位検査は、主に、問題の提示が音声言語で、答え方が音声言語によるもので、6種類の下位検査から構成されています。このうちの5種類を基にこれらに関する知的能力の水準である「言語性IQ (V I Q)」を測定することができます。
- ・ 動作性下位検査は、主に、問題の提示が視覚的に提示され、答え方が動作によるもので、7種類の下位検査から構成されます。このうちの5種類を基にこれらに関する知的能力の水準である「動作性IQ (P I Q)」を測定することができます。

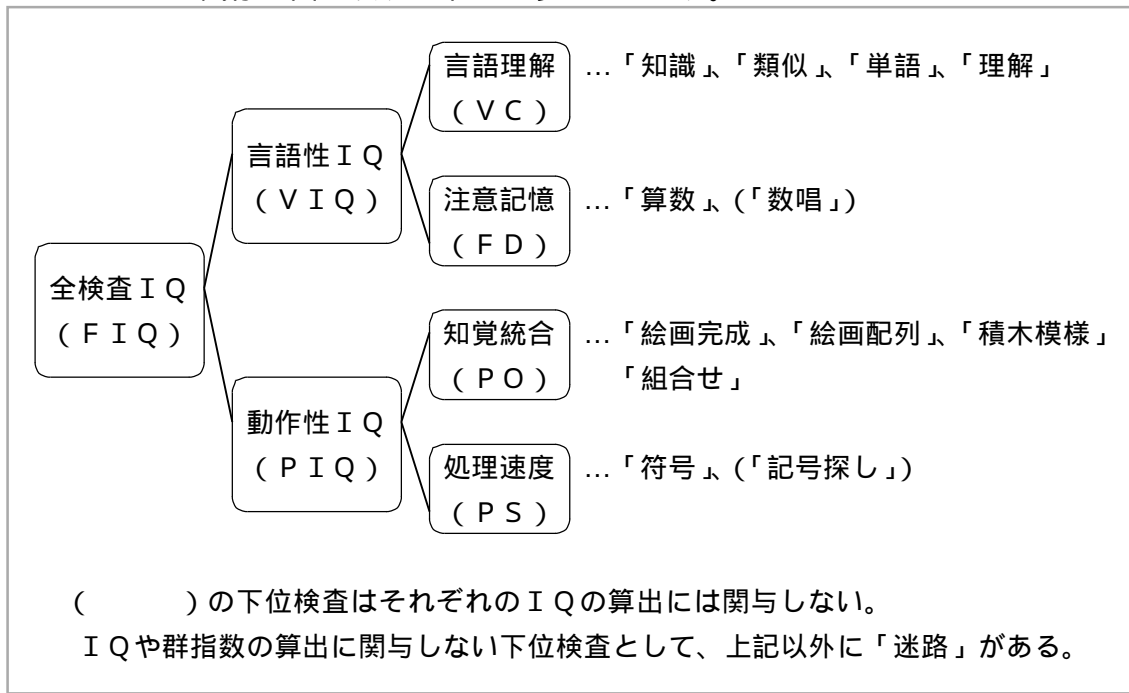
言語性下位検査や動作性下位検査はそれぞれを更に2つのグループに分けることができます。それらのグループ名を「群指数」と呼んでいます。以下の群指数の()内は各群指数が示す意味を表しています。

- ・ 言語性下位検査 言語理解（言語の理解力や表現力）
 - 注意記憶（注意力・集中力、聴覚的作動記憶、数処理能力）
- ・ 動作性下位検査 知覚統合（視覚的な認知能力、視覚 - 運動的な表出能力）
 - 処理速度（処理速度、視覚的作動記憶）

群指数に示すそれぞれの能力が弱いと次のようなことが考えられます。

言語理解（VC）が弱いと、
 言葉を理解することや表現することが苦手だったり、言葉を使って考えることが苦手であったりします。
 注意記憶（FD）が弱いと、
 人の話を聞かなかつたり、何かしようとしてもすぐに別の行動に移ってしまつたり、言葉や数をすぐに覚えることが苦手であったりします。
 知覚統合（PO）が弱いと、
 目で見えたことや状況の理解が難しかったり、動作で表現することが苦手であったりします。
 処理速度（PS）が弱いと、
 目で見えたことをすぐに覚えたり、形を正確に捉えたりすることや、物事を素早く処理することが苦手であったりします。

これらの関係を図に表すと下のようになります。



WISC - III の構成等

ウ 各下位検査の概要と固有の能力

各下位検査がそれぞれどのような検査なのか、どのような能力等を測定できるものなのかを知ることは、それぞれの下位検査が示す数値の解釈を知ることと同様に、子どもの認知特性等を知るうえでとても大切なことです。それぞれの下位検査の概要とそれらが示す固有の能力等については次の表に記しています。

順	下位検査	下位検査の検査概要	固有の能力
1	絵画完成	絵カードを見て、その絵の中で欠けている部分を指さしや言葉で答える。 (例)「男の人」の絵カードであるが、よく見ると腕時計のバンドだけがない。	視覚刺激に素早く反応する力 視覚的長期記憶
2	知識	日常的な事柄や場所等、一般的な知識に関する質問に答える。 (例)一年の4つの季節をあげてください	一般的な事実についての知識量
3	符号	幾何図形や数字と対応している記号を書き写す。次の例は実際とは異なります。 (例)『1』は『+』、『2』は『)』、『3』は『>』等のきまりがある時、『2』の記号は?『1』は?	事務処理の速度と正確さ 視覚的短期記憶 動作の機敏さ
4	類似	共通の概念を持つ2つの言葉がどのように類似しているかを答える。 (例)「りんごとバナナではどんなところが似ていますか」?	論理的なカテゴリー的思考
5	絵画配列	物語を描いた数枚の絵カードが特定の順番で並べてあり、意味が通るように並び替える。 (例)「すべり台をすべる絵」「すべり台に上る絵」「すべり台の上についた絵」の並び替え	時間的な順序の認識時間概念 結果を予測する力
6	算数	算数の文章問題に答える。 (例)「2本のクレヨンと3本のクレヨンを合わせたら全部で何本ですか」	計算力 (聴覚的短期記憶)
7	積木模様	モデルとなる模様を見て、同じ模様になるように、決められた数の積木を用いて作る。	全体を部分に分解する力 非言語的な概念(解法の法則性)を形成する力 自分が考案した空間構想に対象を位置づける力
8	単語	単語(刺激語)を聞き、その意味を答える。 (例)「誕生日とはなんですか」	言語発達水準 単語に関する知識
9	組合せ	特定の配列で示してあるピースを組み合わせて、具体物の形を完成する。 (例)「馬」や「車」のパズル	感覚運動のフィードバックを利用する能力 部分間の関係を予測する力 思考の柔軟性
10	理解	日常的な問題の解決と社会的なルール等についての質問に答える。 (例)「あなたが友達のボールをなくした時は、どうしたらよいですか」	実知的知識を表現する力 過去の経験や既知の事実を正確に評価する力
11	記号探し	刺激記号が記号群の中にあるかどうかを判断し回答欄にあるかないかを答える。 (例)「刺激記号の「<」が右のいくつかの記号群の中にあるかないか」	視覚的探索の速さ
12	数唱	数字(数字列)の読みを聞き、同じ順番、又は、逆の順番で数字(数字列)を言う。 (例)「7、2、9、6、はいどうぞ」	聴覚的短期記憶
13	迷路	迷路の問題を解く。	視覚的パターンをたどる力 見通し能力

(2) WISC - の検査結果の解釈の仕方

検査結果を解釈する際は、次のようなステップで行います。

- step 1 ... 3つのIQ (全検査IQ、言語性IQ、動作性IQ) の解釈
 - step 2 ... 4つの群指数 (言語理解、知覚統合、注意記憶、処理速度) の解釈
 - step 3 ... 下位検査による解釈
- 各下位検査による解釈と複数の下位検査による解釈の2パターン有り

ア 3つのIQによる解釈

全検査IQ (FIQ)、言語性IQ (VIQ)、動作性IQ (PIQ)とも、100を平均値としてとらえ、下の表のように知能水準を分類することができます。

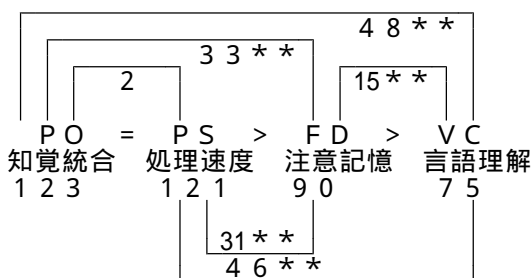
IQ	分類	理論上の割合
130以上	非常に優れている	2.2%
120~129	優れている	6.7%
110~119	平均の上	16.1%
90~109	平均	50.0%
80~89	平均の下	16.1%
70~79	境界線	6.7%
69以下	精神遅滞	2.2%

また、言語性IQと動作性IQに大きな差(ディスクレパンシー)がある場合(一般に15程度の差が生じている場合とも言いますが、正確には検査マニュアルの有意差表を参考にして5%水準の有意差が認められる場合を言います)には、個人内差が大きいことや、能力に偏りがあることが考えられるので、全検査IQ (FIQ)の数値についてはそれ自体を慎重に判断する必要が生じてきます。

言語性IQ > 動作性IQ 言語能力優位、聴覚優位
 言語性IQ < 動作性IQ 非言語能力優位、視覚優位

全検査IQはバランスがとれた発達をしているときこそ意味があるものなのです。

イ 4つの群指数による解釈



4つの群指数の高いものを左から順に並べ、各群指数間の差を記入するといった左のような整理法が視覚的に分かりやすくなります。

「**」は5%水準の有意差を表しています。「>」は隣り合う群指数間での有意差があることを表しています。この場合、知覚統合と処理速度が同程度で高く、それより注意記憶が低く、更にそれより言語理解が低いことがわかります。

ウ 下位検査による解釈

上述のように、各下位検査による固有の能力等を解釈することと、複数の下位検査に見られる共通した固有の能力等の解釈をすることの2パターンがあります。前者は「WISC - の下位検査の概要と固有の能力」が参考になります。後者のためのプロフィール分析表が参考になりますが、ここでは扱っておりません。

WISC - の結果の見方と例

日本版

WISC -
プロフィール

評価点 (SS) は、年齢別の換算表を基に、素点から評価点へ換算します。

検査日	2008	年	12	月	8	日
生年月日	2000	年	3	月	29	日
年齢	8	年	8	月	9	日

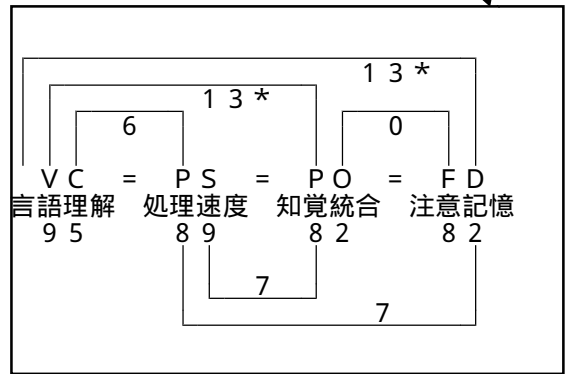
下位検査	粗点	評価点 (SS)					
1 絵画完成	8		4		4		
2 知識	9	8		8			
3 符号	24		6				6
4 類似	9	9		9			
5 絵画配列	24		8		8		
6 算数	12	8					8
7 積木模様	32		10		10		
8 単語	19	11		11			
9 組合せ	17		7		7		
10 理解	12	9		9			
11 (記号探し)	17		10				10
12 (数唱)	8	6					6
13 (迷路)	13		10				
評価点合計		45	35	37	29	14	16
		言語性	動作性	言語理解	知覚統合	注意記憶	処理速度
		80					
		全検査					

IQ や群指数も、換算表を基に、それぞれ評価点の合計から換算します。

	評価点合計	IQ/群指数	パーセンタイル
言語性	45	94	34
動作性	35	79	8
全検査	80	85	16
言語理解	37	95	37
知覚統合	29	82	12
注意記憶	14	82	12
処理速度	16	89	23

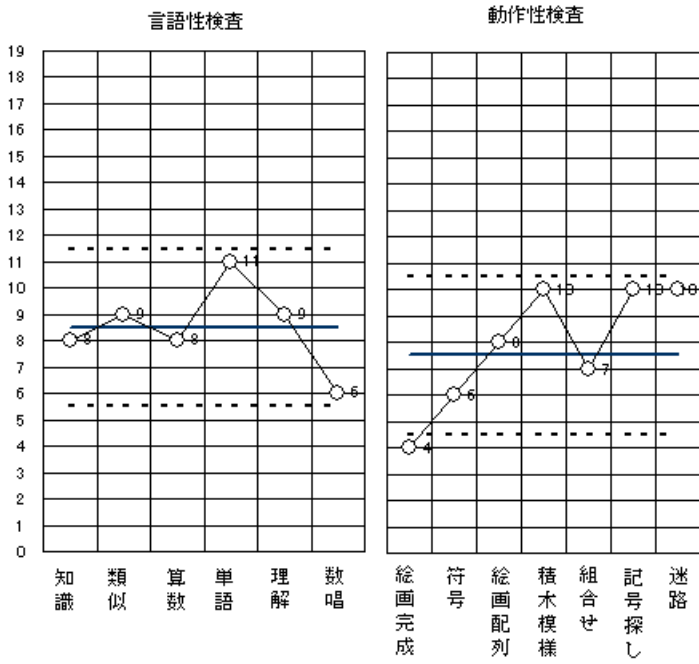
下は、群指数を整理した図です。

【3つのIQについての解釈の例】
 全検査IQ (FIQ) = 85 で知能水準は、「平均の下」の範囲です。
 言語性IQ (VIQ) = 94 で知能水準は、「平均」の範囲です。
 動作性IQ (PIQ) = 79 で知能水準は、「境界線」の範囲です。
 これらのことから、FIQより全体の知能水準は、「平均の下」ですが、VIQとPIQの差が、15あり、統計的に有意な差が認められるため、FIQの解釈には慎重を要します。
 VIQ > PIQより、言語的知能が非言語的知能より優れていると考えられます。



【4つの群指数についての解釈の例】
 言語理解 (VC) と知覚統合 (PO) や注意記憶 (FD) の差がともに13であり、5%水準の有意差が認められます。VCが高く、言語の理解力や表現力は強いと考えられます。また、POやFDが低く、視覚的な認知力や注意力・集中力が弱いと考えられます。

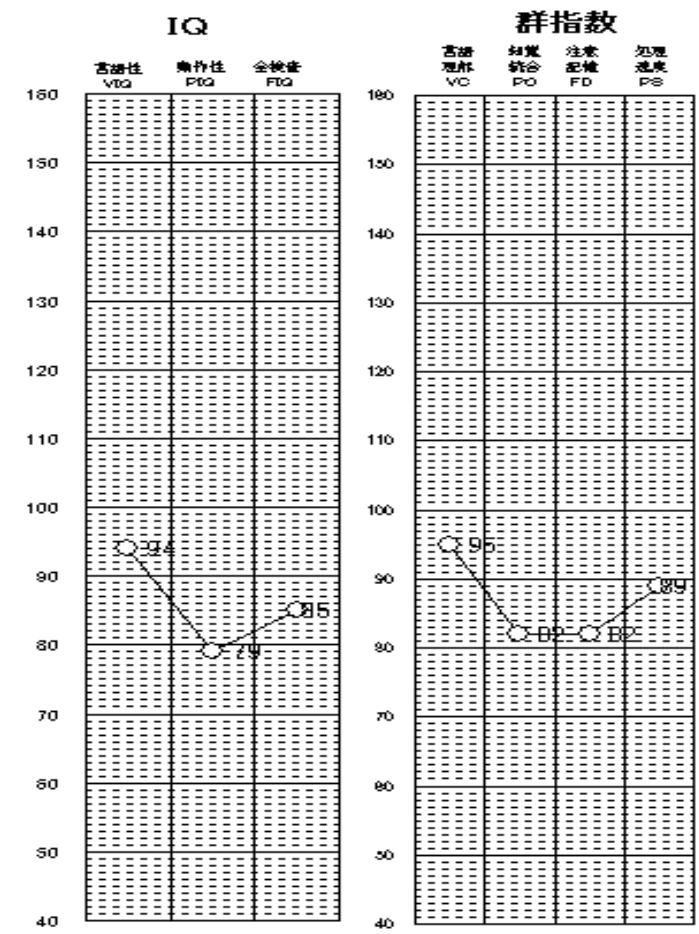
下位検査評価点



各下位検査の評価点をグラフで示すと、それぞれの能力等の強さ、弱さが分かりやすくなります。

言語性検査、動作性検査それぞれの評価点平均に対して、±3のところを線と引くと、強い能力や弱い能力として有意に差がある下位検査が分かりやすくなります。

下位検査による解釈だけに言えることではないのですが、検査結果は、それを裏付けるための情報（日々の行動観察や検査時の様子から見られるもの等）が必要です。示す数値だけにとられすぎないようにすることは、子どもを理解するうえでとても大切なことです。



【下位検査による解釈の例】
 言語性検査、動作性検査においてそれぞれの評価点の平均より著しく高い下位検査は「単語」「積木模様」「記号探し」で、反対に「数唱」と「絵画完成」は低かったことが分かります。
 知覚統合（PO）を構成する「積木模様」は10で高いですが、「絵画完成」が4と低く、「組合せ」が7です。このことから、見本と同じように形を構成する力は検査上問題ないですが、視覚記憶と、視覚的なイメージ構成（頭の中である形をイメージする力）が難しいと考えられます。
 注意記憶（FD）を構成する「数唱」は6で低いですが、「算数」は8で本児の中で低くはないのですが、検査時に聞き返しが多かったです。注意集中の問題から、特に数字などの無意味性の聴覚刺激において、聞き漏らしと保持の難しさがあると考えられます。

ここまで紹介してきた検査による情報のような、より客観的に把握することができる子どもの特性等の情報を、個別の指導計画を作成する際に有効に活用していきましょう。